

## 『禅問答』

### ——垂示の心得——

鈴木省訓

#### はじめに

禅問答について、鈴木大拙博士の「禅問答」と題する一文の初めに、禅には他の宗旨と異なった一つの特色がある。それは『禅問答』ということである。(中略)禅問答の特色は知的ではない、論理的でも、説明的でも、解釈的でもない。また、単なる啓蒙的でもない、教訓的でもない。俗にいう『体当り』的である。それ故、一問一答でなければ、発展しても二、三度の往復あるにすぎぬ。知的でないから発展性がない。従って対話とはならぬ。もとよりカテキズムではない。それで、禅の問答は、往々にして、剣客の立会いになぞらえられる。一方の太刀が動くかと思うと、相手は倒れている。敵流と武蔵の勝負であるといってもよい。両刃鋒を交えて避けることをもちいずともいう。こんなあんばいに『宗教』が取り扱われたところはどこにもない。

というように、禅には、問答という特殊な面を持っている。

(鈴木大拙選集2「禅問答と悟り」)

禅宗には、古来より問答という対話の中で、自己の境界を示し、他の境界を見、更に、自己の力量を挙示してきたのである。これが禅問答の持つ意味合いであろう。しかし、禅問答というと、一般には訳の分からないことの代名詞のように言われている。だが、禅に参じたものには、決して訳の分からないものではない。第三者には、訳の分からないように聞こえても、当事者にとっては十分に理解できるものである。では、何故意味不明のような解釈がなされるのであろうか。

仏教には、多くの経典があり、この経典は、仏教の教祖である釈尊が、悟りを開かれてから後、四十九年間の生涯において説かれたものであることは、誰でも知っていることである。しかし、禅の言葉の中には、「四十九年一字不説」といい、釈尊は文字によっては何も説いてい

ないのであると言う。それは、禪が不立文字、教外別伝と言われるからであるというのである。このような言葉によっても、やはり、ちんぶんかんぶんと言われても仕方がないようにも思えてくる。さらには、問答の答えのほとんどが論理の上で成り立っているのではなく、境界によって成り立っているからでもある。

この禅問答は、現在、臨濟禪の室内という場において活発に用いられている。これは、公案修行という中においてのことであり、このほかに用いられているものは、形式に墮した感がある。この形式的な禅問答に「立班垂示式」がある。これは、将に禅問答のさえたるものではないかと考える。形式的である分、形が整っている。しかし、その昔、これらの問答が活潑潑地に、また自由自在に行われていたのである。

この「立班垂示式」の問答集が、戦後、ガリ版印刷によって出版された。これは、京都の妙心寺派のものであり、妙心寺派の住職になる為の「垂示式」に用いられたものである。最近、この垂示式の心得を示した本書を古本屋で入手した。そこで、今回この「垂示心得」をそのまま復刻しようと考えたのであるが、その内容を見るに、そのままの復刻には問題が生じると考え、一部を変更して掲載することにした。

この復刻における問題点は、どのようなことであるをはっきりさせなければ、そのまま復刻をすればよいとの意見もでるであろう。そこで、まず、私の考える問題点を述べることにする。

本書の体裁は、まず公案の本則があり、その後、本則の公案自体に著ける「別語」という著語がある。この著語が、現在の臨濟禪の室内に

おいて用いられているものであることが本書の整理をしていく段階で分かったのである。そこで、本書をそのままに公表することは良いことではないと考えたのである。近年、天機を漏らすなどといって、室内の一部を公表する人もいるが、公案の持つ意味からすれば喜ばれた行為ではない。臨濟禪における室内は、密伝とされているが、その意味は、臨濟禪の修行形態から見れば、密伝とされる意味が分かるはずである。たとえ一部といえども、公案の内容を公表することは、公案修行を終えたものにとっては関係のないことかも知れないが、これから修行をするものにとっては、大いに迷惑なことである。白隠及び白隠下で作られた公案体系は、本則の公案に参じ、その公案の見処を出し、拶所といわれる細かな調べを行い、さらにその公案に著語を著けるのである。このようなことの繰り返しの中で禅僧としての力量、眼力を培っていくのである。公案修行は、公案による段階的過程を経て、修行が為され、禅僧としての力が着くように公案体系が作られている。著語一つといえども、それを示すことは、修行するものにとって、公案体系の著語による修行を省略させる結果になる。これは、けしてよいことではない。

室内を公表する人は、将来の臨濟禪をどのように考えているのであるうか。室内を公表する人は、このように世に示すことが、禅の拳揚であり、禅に帰依する人が増えて良いことであるなどと言うのであろう。しかし、室内の一部を謎めいたもののように垣間見させ、それで参禅者を増やすことにはどのような意味があるのであろうか。そのような形で入って来たものは、公案を早く見せてくれる参禅道場に通うことになるので

あろう。そのようなことで参禅するものが増えても何の意味があるのであろう。私はこのように考えて、著語に就いては、最後のまともて示すことにした。また、本則等に就いては、それぞれ書き下し文を付し、その出典を示すことにした。本書の形態がなるべく損なわれないように配慮をしたつもりであるが、公案の持つ意味合いを私なりに考え、このような形で資料の紹介としたのである。

次に、私の知る「垂示式」の順序は、

① はじめに住持となる者が、「記得す。云々」と本則の公案を提示する。

② 次に一番目の禅客が上り句を唱えながら住持の前に進みでて本則の公案に対する著語を述べる。

③ 次に、その禅客が一則公案を挙げて住持にその意を問う。

④ 住持はこの公案に対し、著語によって答える。

⑤ 禅客は、その著語を承けて、下り句を唱えながら元の場所に戻る。

⑥ それと同時に、第二番目の禅客が上り句を唱えながら住持の前に進みでて本則の公案に著語を述べる。

⑦ そして、その禅客も一則公案を挙げて住持にその意を問う。

⑧ 住持は、又その公案に対し、著語によって答える。

⑨ 禅客は、その著語を聴いて、下り句を唱えながら、元の場所に戻る。

⑩ 戻ると住持は、「予も又別語あり」と言い、別語を唱えて終るのである。

この垂示式は、丁寧に行われている部類に属するものであると思う。では『垂示心得』の本文を示すことにする。

#### 垂示式ニ就テ心得

一、往古ハ百日安居、少クトモ七日以前ニ登山、直チニ宿坊ニ届出テソノ指南ヲ受クベシ。期中ハ門外禁足ヲ旨トシ、斎戒謹慎、垂示ノ深意ヲ拈提スベシ。

近時剃髪スラ怠ル徒輩アリ、嚴戒ヲ要ス。

#### 垂示式ニ就テ心得

一、越格ノ宗師家タリトモ、柏樹賊機ノ話ハ遠慮スベシ。

一、問答ノ語ハ、三言以下及ビ作語ヲ禁ズ。

一、唱フル声ハ中音ヲ好トス。

一、進退動作總テ緩急節ヲ得ベシ。

一、合掌ハ、十指親密(參差スベカラズ、離開スベカラズ、指頭下垂ス可カラズ)胸ヲ離レ、胸前ニ在テ高低所ヲ得ベシ。

一、又手ハ、左右ノ掌ヲ交果胸ニ当テ(胸ヲ抑フルガ如クス可カラズ)左手外ニ在リ右ノ大指左ノ大指ヲ抑へ、左右共ニ四指直伸シテ屈ス可カラズ。

一、問訊ハ合掌低頭スルナリ。深問訊、深低頭ハ、皆ナ敬肅ノ意有ル可キナリ。深々問訊ハ低頭シテ、左臂ノ袈裟ノ下角地ニ到ルナリ。

一、中啓扇ヲ袖ニ入ルニハ左手ニテ右袖ノ上角ヲ引キ上ゲ、右手ニテ扇

柄ヲ握リ袖底ノ奥ニ安ク。

一、拜スルニハ、右手ニ啓ヲ持チ右手ノ大中食ノ三指ニテ数珠取り、左手ニ移シ持チ、外輪ヨリ右手ヲ伝へ、下ノ大珠ヲ持チ一緘シテ、左手ニ縮子持チ（大珠総皆掌背ニ向テ垂ル）、右手ニ坐具ヲ（展開ノ処）取り、左手ニ移シ持チ、右ニ向フニ随テ其ノ展開ノ処ヨリ、右手ヲ伝へ、其ノ右角ニ至レバ（左ニ大指中指ノ間ニ掛之）、右手具ヲ引キ出スニ随テ左手具ノ三分ノ二ヲ持ツ。（一分ハ垂レテ左掌ノ背ニ在リ、二分ハ自左ノ手ニ持テ） 両手一処ニ聚レハ、乙字ノ如ク両ノ大指食指具ノ上葉ノ両角ヲ撮ミ左右ヘ開クニ随テ余指ヲ放テハ其ノ裏面自外ニ向フ。開クニ随テ身ヲ左轉シ（北面）具端少シ展レバ、先ツ左足履ヲ脱シテ具端ヲ踏ミ、次ニ右足履ヲ脱シテ具端ヲ踏ミ兩膝ヲ地ニ着ケ具ヲ展ヘ了テ、啓ヲ右具角ニ置キ、先ツ左手胸ニ當テ右手ヲ地ヲ支ヘ起立、又手問訊シテ左手胸ニ當テ、先ツ右手ヲ地ニ托ケ覆、次ニ左手ヲ地ニ托ケ覆、兩掌ヲ展ベ、具ノ前端ニ到テ仰ケ頭額地ニ至ル、兩掌ニテ仏祖ノ双足ヲ接スル勢ヲ作ス。

立ツ時ハ先ツ右手地ヲ支ヘ、次ニ左手胸ニ當テ起テ了テ又手ス。  
三拜了レバ右手ニ啓ヲ持チ、大食指ニ坐具ノ右辺上角ヲ取り、起ニ随テ先ツ右足履ヲ著ケ、次ニ左足履ヲ著ケ、一翻シテ右手ノ具角ヲ左手ニ移シ持チ、左手ノ具角ヲ右手ニ持チ、具ノ裏面身ニ向ケ少シ東面シテ具ヲ摺テ（身ニ向ケ摺之）左臂ニ掛ケ、其上ヘ数珠ヲ掛ケ北面シテ又手進一步問訊。

### 式次

一、時至レバ衣ヲ整ヘ、本庵方丈ニ於テ習儀ヲ了テ、啓ヲ持チ履ヲ著ケ

テ玉鳳院門ヨリ入テ、法皇ニ問訊。次ニ廊下西辺ニ南面シテ待ツ。

一、磬ヲ聞テ啓ヲ袖ニシ合掌ヲ捧ヘ入堂立定セバ又手、平僧ノ服装ナレバ、微笑塔西側ノ入口ニ南ヲ首トシ東面ニ立ツ。

一、微笑塔諷經大悲咒ノ時ハ堂外南側西辺ニ東ヲ首トシ北面ニ立ツ。

一、行導ノ時上下ニ問訊シテ進ミ、第五会ノ散衆ノ鈴ヲ聞キテ又手シテ堂外ニ出デ定処ニ直立（首東ニ在リ）。

一、禪客ノ立定ヲ見テ正面入口（真中ヲ避ケ東辺ヨリ入ル）門前ニ双足ヲ揃ヘ左足ヨリ越ヘ右足ヲ揃ヘ了テ<sup>□</sup>半歩前ニ進ミ東南ニ面シテ立チ右手ニ啓ヲ取り左手ヲ以テ右袖ヲ支ヘ啓ヲ柱石ニ立テ掛ケ了テ直立威儀ヲ整ヘ逆轉シ（左ニ廻リ）頭ヲ正シ又手シテ<sup>①</sup>進ム<sup>②</sup>ニ至テ借坐問訊（深々）了テ頭ヲ正シ又手順轉（右ニ廻ル）シ<sup>③</sup>ニ進ム<sup>④</sup>ニ至ツテ進一步問訊（低頭セズ）又手禪客ノ中央ヲ進テ少シ西ニ廻リ（一步斗リ）禪客ヨリ三四歩ノ処ニ南面シテ立チ更ニ進一步（提綱アレバ唱フ）右手ニ座具ヲ取り左手ニ移シ右手ヲ添ヘ（<sup>胸ヨリ少シ</sup>シ離シ）又手ノ如クシテ本則ヲ唱フ、語尾ニ至テ坐具ヲ収ム、禪客ノ語ヲ聞テ又座具ヲ取り、答語ヲ唱フ（禪客ト問答中坐具ヲ持ツ）余亦別語ト唱ヘ乍ラ、左手ニ坐具ヲ持チ右ヲ下<sup>①</sup>げ坐具ノ兩折ノ外ヘ食指中指ヲ出シ無名指小指ハ兩折ノ中ニ入レ大指ヲ内側ニ出シ坐具ノ下方ヲ少シ突き出シ少シ低頭（余亦別語ノ語尾ニ）了テ右手ヲ元ニ歸シ頭ヲ正シテ別語ヲ唱フ、唱ヘ了テ坐具ヲ収メ更ニ進一步問訊（低頭セズ）了テ又手、啓ノ処ニ到リ左手ニ右袖ノ下方ヲ支ヘ右手ニ啓ヲ持シ順轉シテ門前ニ双足ヲ揃ヘ左足ヨリ越ヘ右足ヲ揃ヘ了テ列立ノ前ヲ進ミ下位ニ立ツ。

一、散衆後真前へ従香ヲ備へ三拝了テ焼香、深々問訊了テ堂外ニ出ツ。  
一、本菴開祖并ニ徒弟開祖ニ注拝、了テ祝礼大絡了テ玄関ニ送ル。

(進退略図省略)

左ニ記ス処ノ本則ハ、垂示式舉行セラレタル古人諸師ノ提唱法語ナリ。仍テ別語ノ有無又ハ好シ悪ヲ論セズ、焉ニ記載シテ後人ノ参考トナス者也。

本 則

記得。僧問趙州。狗子還有佛性也否。州曰無。

謹白兩班諸禪德。趙州意旨在何処。請。各々道將一句來。

左右各々好言語。予亦別語。

一、本 則

記得す。僧、趙州に問う。狗子に還つて仏性有りや也た否や。州曰

く無。

謹んで兩班の諸禪德に白す。趙州の意旨何れの処にか在る。

請う、各々一句を道い將ち來たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『無門関』第一則「趙州無字」

趙州和尚因に僧問う。狗子に還つて仏性有りや也た無しや。州云く無。

また、『宗門葛藤集』四九則では、

趙州和尚因に僧問う。狗子に還つて仏性有りや也た無しや。州云く無。僧云く、一切衆生皆仏性有り、狗子什麼としてか却つて無し。州云く、伊に業識性の有在が為なり。又僧有り問う、狗子に還つて仏性有りや也た無や。州云く、有。僧云く、既に有り、甚としてか却つて這箇の皮袋裡に撞入する。州云く、他が知つて故に犯すが為なりとある。

本 則

記得。僧問雲門。如何是諸佛出身処。門曰。東山水上行。

謹白兩班諸位禪師。僧問処暫置。雲門答処底如何弁得去。

請。各々道將一句來。

左右各々好言語。予亦別語。

二、本 則

記得す。僧、雲門に問う。如何なるか是れ諸仏出身の処。門曰く、

東山水上行。

謹んで兩班の諸位禪師に白す。僧の問う処は暫く置く。雲門の答処

底、如何が弁得し去る。請う、各々一句を道い將ち來たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

○ (別語省略)

①『宗門葛藤集』五七則「水上行話」と同一。

本 則

記得。趙州因僧問。如何是祖師西來意。州曰。庭前柏樹子。

謹白兩班諸位禪客。僧問処且置。趙州答処句裡藏鋒。請。各々道將一句來。

左右語句錦上敷花。予亦別語。

三、本 則

記得す。趙州因に僧問う。如何なるか是れ祖師西來意。州曰く、庭前の柏樹子。

謹んで兩班の諸位の禪客に白す。僧の問う処は且らく置く。趙州の答処、句裡に鋒を藏す。請う、各々一句を道い將ち來たれ。

左右の語句、錦上に花を敷く。予も亦別語。

(別語省略)

①『無門関』第三七則「庭前柏樹」には

趙州因に僧問う、如何なるか是れ祖師西來意。州云く、庭前の柏樹

子。

とある。

また、『宗門葛藤集』九則「趙州柏樹」には

趙州因に僧問う、如何なるか是れ祖師西來意。州云く、庭前の柏樹

子。僧云く、和尚境を將て人に示すこと莫れ。州云く、我境を將て人に示さず。僧云く、如何なるか是れ祖師西來意。州云く庭前の柏樹子。後來、法眼の覺鉄嘴に問うて云く、承り聞く趙州に柏樹子の話有り、是なりや否や。嘴云く、先師に此の話無し、先師を謗すること莫れ。眼云く、真の獅子児、能く獅子吼す。

本 則

記得。僧因問洞山。如何是佛。山云。麻三斤。

謹白兩班諸禪德。僧問処且措。向洞山答処底。請。各々道將一転語來。

左右各々好吟獅子吼。予亦別語。

四、本 則

記得す。僧因に洞山に問う。如何なるか是れ仏。山云く麻三斤。

謹んで兩班の諸禪德に白す。僧の問う処は且らく措く。洞山の答処底に向つて請う。各々一転語を道い將ち來たれ。

左右各々好く獅子吼を吟ず。予も亦別語。

(別語省略)

①『無門関』第一八則「洞山三斤」と同一。

『宗門葛藤集』七〇則「洞山三斤」と同一。

本 則

記得。僧問雲門。如何是法身。門曰。六不收。

謹白兩班諸位禪師。僧問処姑措。雲門答処句裡對。請。各々道將一句來。

同右各々好言語。予亦別語。

五、本 則

記得す。僧、雲門に問う。如何なるか是れ法身。門云く、六不收。

謹んで兩班の諸位禪師に白す。僧の問う処は姑く措く。雲門の答処、句裡に対えよ。請う、一句を道い將ち来たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第四七則「雲門六不收」と同一。

本 則

記得。僧問雲門。如何是清淨法身。門曰。花藥欄。

謹白兩班諸位禪客。僧問処且置。雲門答処句裡巖鋒。請。各々道將一句來。

左右語句錦上鋪花。予亦別語。

六、本 則

記得す。僧、雲門に問う。如何なるか是れ清淨法身。門曰く、花藥

欄。

謹んで兩班の諸位禪客に白す。僧の問う処は且らく置く。雲門の答処、句裡に鋒を巖す。請う各々の一句を道い將ち来たれ。

左右の語句錦上に花を敷く。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第三九則「雲門花藥欄」には

挙す。僧、雲門に問う。如何なるか是れ清淨法身。門云く、花藥欄。

僧云く、便ち恁麼にし去る時如何ん。門云く、金毛の狗子とある。

本 則

記得。僧問趙州。方法帰一、一帰何処。州曰。我在青州作一領布衫、重

七斤。

謹白兩班諸禪德。僧問端且置。趙州答処如何弁別。請。各々下一転語來。

左右各々好言語。予亦別語。

七、本 則

記得す。僧、趙州に問う、方法帰一。一何の処にか帰す。州曰く、我、青州に在って、一領の布衫を作る。重きこと七斤。

謹んで兩班の諸禪德に白す。僧の問端は且らく置く。趙州の答処、如何が弁別せん。請う、各々の一転語を下し来たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第四五則「趙州七斤布衫」と同一。

本 則

記得。僧問巴陵。如何是提婆宗。巴陵云。錄椀裏盛雪。

謹白兩班諸大德。僧問処姑措。向巴陵答処底。請。各々道將一転語来。

左右各々好言語。予亦別語。

八、本 則

記得す。僧、巴陵に問う。如何なるか是れ提婆宗。巴陵云く、銀椀裏に雪を盛る。

謹んで兩班の諸大德に白す。僧の問う処は姑く措く。巴陵の答処底に向つて、請う、各々一転語を道い將ち来たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第一三「巴陵銀椀裏雪」と同一。

本 則

記得。雲門大師垂語曰。人々尽有光明。光明在看時。不見暗昏々。作麼生諸人光明。

謹白兩班諸大德。雲門底且置。即今諸禪德光明。請。各々道將一句来。

左右各々絶妙好辞。予亦別語。

九、本 則

記得す。雲門大師垂語して曰く、人人尽く光明有り。光明在るを見る時見ず。暗昏々作麼生か諸人の光明。

謹んで兩班の諸大德に白す。雲門底は且らく置く。即今諸禪德の光明。請う各々一句を道い將ち来たれ。

左右各々絶妙の好辞。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第八六則「雲門厨庫三門」にある。

挙す。雲門大師垂語して云く、人人尽く光明の在る有り。見る時見ず。暗昏々作麼生か是れ諸人の光明。自ら代つて云く、厨庫三門。又云く、好事も無に如かず。

とある。

本 則

記得。盤山垂語曰。三界無法、何所求心。

謹白兩班諸禪德。這箇公案甚有奇怪之所。畢竟如何領得。請。各自露出一転語来。

左右各々好言語。予亦別語。



一〇、本 則

記得す。盤山垂語して曰く、三界無法、何れの所にか心を求めん。  
謹んで兩班の諸禪徳に白す。這箇の公案、甚だ奇怪の所有り。畢竟  
如何が領得せん。請う、各自一転語を露出し来たれ。  
左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第三七則「盤山三界無法」には、  
挙す。盤山垂語して云く、三界無法何れの処にか心を求めん。  
とある。

本 則

記得。僧問雲門。如何是一代時教。門云。對一説。  
謹白兩班諸禪徳。對一説落処有何処。請。各々下一転語来。  
左右各々錦唇繡口。予亦別語。

一一、本 則

記得す。僧、雲門に問う。如何なるか是れ一代時教。門云く、對一  
説。  
謹んで兩班の諸禪徳に白す。對一説の落処、何れの処かに有る。  
請う、各々一転語を下し来たれ。  
左右各々錦唇繡口。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧器録』第一四則「雲門一代時教」には、

挙す。僧、雲門に問う。如何なるか是れ一代時教。雲門云く、對一  
説。  
とある。

本 則

記得。馬大師不安。院主問和尚。近日尊候如何。大師曰。日面仏月面  
仏。  
謹白兩班諸大徳。馬大師為人底如何弁別。請。各々道将一転語来。  
左右各々好言語。予亦別語。

一一、本 則

記得す。馬大師不安。院主問う、和尚近日尊候如何ん。大師曰く、  
日面仏月面仏。  
謹んで兩班の諸大徳に白す。馬大師、人の為にする底、如何が弁別  
せん。請う、各々一転語を道い將ち来たれ。  
左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第三則「馬大師日面仏月面仏」と同一。

本 則

記得。僧問巴陵。如何是吹毛劍。陵曰珊瑚枝々撐著月。

謹白兩班諸大徳。僧問処且置。巴陵答所如何弁別。請。各々道將一句來。

左右各々好言語。予亦別語。

一三、本 則

記得す。僧、巴陵に問う。如何んが是れ吹毛の劍。巴陵曰く、珊瑚は枝々月を撐著す。

謹んで兩班の諸大徳に白す。僧の問う処は且らく置く。巴陵の答所、如何が弁別せん。請う、各々一句を道い將ち來たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第一〇〇則「巴陵吹毛劍」と同一。

本 則

記得。或庵主示衆曰。西天胡子因甚無鬚。

謹白諸大徳。西天胡子因甚無鬚。衲僧門下自有轉身自在処。作麼生是

轉身自在処。請。各々試下一着子來。

左右各々好言語。予亦別語。

一四、本 則

記得す。或庵主、衆に示して曰く、西天の胡子甚んに因ってか鬚無きと。

謹んで諸大徳に白す。西天の胡子甚んに因ってか鬚無きと。衲僧の門下、自ら轉身自在の処有り。作麼生か是れ轉身自在の処。請う、各々試みに一着子を下し來たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『無門関』第四則「胡子無鬚」と同一。

②『宗門葛藤集』第一一七則とも同一。

本 則

記得。趙州示衆云。泥仏不渡水、金仏不渡鑪、木仏不渡火、心仏座屋裡。

謹白兩班諸大徳。這個話頭如何弁別。請。各々道將一転語來。

左右各々玉唇金声。予亦別語。

一五、本 則

記得す。趙州衆に示して云く、泥仏水を渡らず、金仏鑪を渡らず、木仏火を渡らず、心仏屋裡に座す。

謹んで兩班の諸大徳に白す。這個の話頭、如何が弁別せん。請う、各々一転語を道い將ち來たれ。

左右各々玉唇金声。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第九六則「趙州三転語」としてある。

挙す。趙州衆に示す、三転語。

とあるのみである。その後、

頌に云く、泥仏水を渡らず。神光天地を照らす、雪に立つこと如し未だ休めずんば、何人か雕偽せざらん。

頌に云く、金仏鑪を渡らず。人來たつて紫胡を訪う、牌中数箇の字、清風何れの処にか無からん。

頌に云く、木仏火を渡らず。常に思う、破竈墮、杖子忽ちに擊著す、方に知んぬ、我に辜負することを。

とある。

本 則

記得。乾峯示衆云。法身有三種病二種光。汝等諸人還委悉麼。

謹咨詢兩班諸大德。如上端的如何弁別。請。各々道將一転語來。

左右各々好言語。予亦別語。

一六、本 則

記得す。乾峯衆に示して云く、法身に三種病二種光有り。汝等諸人還つて委悉すや。

謹んで兩班の諸大德に咨詢す。如上の端的如何が弁別せん。請う、

各々一転語を道い將ち來たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

①『宗門葛藤集』第一七則「乾峯三種」には、

乾峯和尚上堂して曰く、法身に三種病二種光有り、須く是れ一たび透過して始めて穩座地を解すべし。雲門衆を出でて云く、庵内の人甚麼としてか庵外の事を知らざる。峰呵々大笑す。門云く、猶是れ学人の疑処。峰云く、子是れ什麼の心行ぞ。門云く、也た和尚の相委悉せんことを要す。峰云く、直に須く恁麼に隱密にして始めて穩座地を解すべし。門云く、喏々。

とある。

本 則

記得。僧問趙州。久響趙州石橋、到來只見略約。州云。汝只見略約、且不見石橋。僧曰如何是石橋。州云。渡驢渡馬。

謹白兩班諸禪德。趙州答処如何解會。請各々道將一句來。

左右各々玉唇金声。予亦別語。

一七、本 則

記得す。僧、趙州に問う。久しく趙州の石橋と響く。到來すれば只略約を見るのみ。州云く、汝只略約を見て、且つ石橋を見ず。僧曰く、如何なるか是れ石橋。州曰く驢を渡し馬を渡す。

謹んで兩班の諸禪德に白す。趙州の答処、如何が解會す。請う、各々一句を道い將ち來たれ。

左右各々玉唇金声。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第五二則「趙州渡驢渡馬」と同一。

本 則

記得。僧問趙州。如何是趙州。州曰。東門西門南門北門。

謹白兩班諸禪德。僧問処且措。向趙州答処底。請各々道將一句來。

左右各々好言語。予亦別語。

一八、本 則

記得す。僧、趙州に問う。如何なるか是れ趙州。州曰く、東門西門南門北門。

謹んで兩班の諸禪德に白す。僧の問う処は且らく措く。趙州の答処底に向つて請う、各々一句を道い將ち來たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

①『碧巖録』第九則「趙州四門」と同一。

本 則

記得。梁武帝問達磨大師。如何是聖諦第一義。磨曰。廓然無聖。帝云。对朕者誰。磨曰。不識。

謹白兩班諸大德。初祖廓然無聖処作麼生領會。請各自道將一句來。

左右各々好言語。予亦別語。

一九、本 則

記得す。梁の武帝、達磨大師に問う。如何なるか是れ聖諦第一義。磨曰く、廓然無聖。帝云く、朕に対する者は誰そ。磨曰く、不識。

謹んで兩班の諸大德に白す。初祖の廓然無聖の処、作麼生か領會す。請う、各自一句を道い將ち來たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

①『碧巖録』第一則「聖諦第一義」には、

挙す。梁の武帝、達磨大師に問う。如何なるか是れ聖諦第一義。磨曰く、廓然無聖。帝云く、朕に対する者は誰そ。磨曰く、不識。帝契わず。達磨遂に江を渡つて魏に至る。帝後に挙して誌公に問う。誌公云く陛下還つて此の人を識るや否や。帝云く、不識。誌公云く、此れは是れ観音大士、仏心印を伝う。帝悔いて遂に使いを遣わし去つて請ぜんとす。誌公云く、道うこと莫れ、陛下使いを発し去つて取らんと。闔国の人去るも佗亦回らずとある。

本 則

記得。僧問百丈。如何是奇特事。丈云。独坐大雄峯。僧乃礼拜。丈便打。

謹白兩班諸大德。此僧礼拜知恩酬恩乎。將有過蒙棒乎。請。試下一着子來。

左右各々如金如玉、簇花簇錦。予亦別語。

二〇、本 則

記得す。僧、百丈に問う。如何なるか是れ奇特の事。丈云く、独座大雄峰。僧乃ち礼拝す。丈便ち打つ。

謹んで両班の諸大徳に白す。此の僧の礼拝、恩を知り恩に酬ゆ。將に過有つて棒を蒙る。請う、試みに一着子を下し来たれ。

左右各々金の如く玉の如し。花に簇り錦に簇る。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第二六則「百丈大雄峰」と同一。

本 則

記得。僧問趙州。至道無難、唯嫌揀扱。如何是不揀扱。州云。天上天下唯我独尊。

謹白両班諸位禪師。不露鋒釦。趙州向答処。請。各々道將一句来。

左右各々好言語。予亦別語。

二一、本 則

記得す。僧、趙州に問う。至道無難、唯嫌揀扱と。如何なるか是れ不揀扱。州云く、天上天下唯我独尊。

謹んで両班の諸位禪師に白す。鋒釦を露わさざる趙州の答処に向かつて、請う各々一句を道い將ち来たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第五七則「趙州田庫奴」にあり、

拳す。僧、趙州に問う。至道無難、唯嫌揀扱と。如何なるか是れ不揀扱。州云く、天上天下唯我独尊。僧云く、是れ猶お是れ揀扱。州云く、田庫奴、什麼の処か是れ揀扱。僧無語。とある。

本 則

記得。僧問趙州。至道無難、唯嫌揀扱。是時人窠窟否。州云。曾有人問我、直得五年分疎不下。

謹白両班諸大徳。僧問処姑措。向趙州答処底。請。各々道將一句来。

左右各々好言語。予亦別語。

二二、本 則

記得す。僧、趙州に問う。至道無難、唯嫌揀扱。是れ時の人の窠窟なりや否や。州云く曾て人有りて我に問う。直に得たり、五年分疎不下なることを。

謹んで両班の諸大徳に白す。僧の問う処は姑く置く。趙州の答処底に向かつて、請う、各々一句を道い將ち来たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

①『碧巖録』第五八則「趙州分疎不下」と同一。

本 則

記得。世尊因拈華示衆。是時衆皆默然。惟迦葉尊者破顔微笑。世尊云。吾有正法眼藏微妙法門。付屬摩訶迦葉。

謹白兩班諸大德。迦葉領得什麼辺事。乞。試道將一句來。左右各々好言語。予亦別語。

二三、本 則

記得す。世尊因に華を拈じて衆に示す。是の時衆皆默然たり。惟だ迦葉尊者のみ破顔微笑す。世尊云く、吾に正法眼藏、微妙の法門有り。摩訶迦葉に付屬す。

謹んで兩班の諸大徳に白す。迦葉、什麼の辺事を領得すや。乞う、試みに一句を道い將ち來たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『無門関』第六則「世尊拈華」にある。

『宗門葛藤集』第一四三則「世尊拈華」にもある。

『無門関』には

世尊、昔靈山会上に在って、花を拈じて衆に示す。是の時衆皆默然たり。然るに惟だ迦葉尊者のみ破顔微笑す。世尊云く、吾に正法眼藏、涅槃妙心、実相無相微妙の法門有り。不立文字、教外別伝、摩訶迦葉に付屬す。

とある。

本 則

記得。大応国師曰。通天有路。不許夜行。大道無人。須投明到。謹白兩班諸大徳。投明到底作麼生。請。各々道將一句來。左右各々好言語。予亦別語。

二四、本 則

記得す。大応国師曰く。通天に路有り、夜行を許さず。大道に人無し、須く明に投じて到るべし。

謹んで兩班の諸大徳に白す。明に投じて到る底作麼生。請う、各々一句を道い將ち來たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『円通大応国師語録』卷上、「太宰府万年崇福寺語録」の中、「書記の乗払謝するの上堂」にある。(大正蔵80・一〇四C)

書記の乗払を謝するの上堂。僧問う。諸仏の行きて到らざる処、如何が説く。(省略)師乃ち云く、通天路有り。夜行を許さず。大道人無し、明に投じて須く到るべし。且らく道え、甚に因ってか是の如くな。一字画を著す。八字兩ノ無し。

とある。

また、『碧巖録』第四一則「趙州大死底人」には、

挙す。趙州、投子に問う。大死底の人、却って活かす時如何。投子云く、夜行を許さず。明に投じて須く到るべし。

とあり、これを受けて、この本則ができあがっているものと思う。

本 則

記得。仰山一日官人来参。山問官何位。官人云推官。山竖起扨子云。還推得者否哉。官人無語。

謹白兩班諸大德。代官吏作麼生祇对。請。各々呈示一句来。

別語

二五、本 則

記得す。仰山一日、官人来たつて参す。山、官に問う、何の位ぞ。

官人云く、推官。山扨子を竖起して云く、還つて推得するや否や。

官人無語。

謹んで兩班の諸大徳に白す。官吏に代つて作麼生か祇对せん。請う、各々一句を呈示し来たれ。

別語

(別語省略)

①『碧巖録』第六八則「仰山問三聖」の評唱の中に、

一日官人有り、来たつて仰山に参す。山問う、官何の位にか居す。云く、推官。山扨子を竖起して云く、還つて這箇を推得すや。官人無語。

とある。

本 則

記得。澗山示衆曰。有句無句、如藤倚樹。

謹白兩班龍象。如上葛藤如何弁別。請。各々道將一句来。

左右各々玉振金声。予亦別語。

二六、本 則

記得す。澗山、衆に示して曰く、有句無句は藤の樹に倚るが如し。

謹んで兩班の龍象に白す。如上の葛藤、如何が弁別せん。請う。各々一句を道い將ち来たれ。

左右各々玉唇金声。予も亦別語。

①『葛藤集』第三五則「懶安有句」であるが、本文は長文である。

福州の長慶懶安和尚、衆に示して云く、有句無句は藤の樹に倚るが如し。疎山聞き得て道く、我に一転語有り、去つて者の老子に問わんと要す。夏罷んで遂に閩に入って懶安和尚に見ゆ。又之れを澗山和尚と謂う。裴相国閩に師たり、澗山より請じて長慶に住せしむ。疎山彼に到つて師の泥壁するに値う次、疎山便ち問う、有句無句は藤の樹に倚るが如しと、是れ和尚の語なりや否や。澗山云く、是。疎山云く、忽然として樹倒れ藤枯るれば句何れの処にか帰せん。澗山泥盤を放下し、呵呵大笑して方丈に帰る。疎山云く、某甲三千里外に布单を売却して特に此の事の為に来る。和尚甚と為してか某甲が与に説かざる。澗山云く、侍者錢を將ち来たつて者の矮闍梨に与えて去らしめよ。又疎山い謂つて云く、他日独眼竜というもの有つて汝が為に点破し去る

こと在らん。疎山後に明招に到って前話を挙す。招云く、澗山頭正しく尾正し、只是れ知音に遇わざるのみ。疎山云く、忽然として樹倒れ藤枯れば、句何れの処にか帰せん。招云く、更に澗山の咲いをして転た新ならしむ。疎山当下に省有り。乃ち云く、澗山元来咲中に刀有り。後來大慧禪師、圓悟の会裡に在り、悟遂に栴木堂に居らしめ不釐務待者と作し、毎日士大夫と同じく入室せしむ。圓悟は、只有句無句は藤の樹に倚るが若しというを挙すのみ大慧纔かに口を開けば、悟便ち不是と道う。是の如くなること將に半年ならんとす。一日趙表之と同じく方丈薬石の次、大慧筋を把って手に在り、飯を喫することを忘れたる。圓悟師を顧みて表之に語って曰く、只這の漢黄楊木の禪に参得す。師遂に狗の熱油鑊を看るを喩えと為す。圓悟曰く、只這便ち是れ金剛圈栗棘蓬。居ること何も無くして圓悟を扣いて曰く、聞く和尚嘗て五祖に此の話を問うと、知らず其の話を記すや否や。圓悟笑うのみ。師云く、若し人天衆前に対して問わんに、今豈に知る者無からんや。圓悟乃ち云く、向に有句無句は藤の樹に倚るが如しという時如何と問う。祖云く、描すれども描し成らず、画けども画き就らず。又問う、忽ち樹倒れ藤枯るるに遇う時如何。祖云く、相随い来る。師挙するを聞いて乃ち声を抗げて曰く、某甲会せり。圓悟曰く、只恐らくは爾公案を透り得ざることを。云く、請う和尚挙せよ。圓悟遂に挙す。師語を出すに滞ること無し。圓悟曰く、今日方に知る、吾汝を欺かざること。遂に臨濟の正宗記を著わし以て之れを付し、記室を掌り、分座して徒に訓えしむ。

とある。

本 則

記得。僧問臨濟。如何是四種無相境。

謹白兩班諸大德。如上意旨如何。請。試道將一句來。

左右各々好言語。予亦別語。

二七、本 則

記得す。僧、臨濟に問う。如何なるか是れ四種無相の境。

謹んで兩班の諸大徳に白す。如上の意旨如何。請う、試みに一句を道い將ち來たれ。

左右各々好言語。予亦別語。

(別語省略)

①『臨濟録』及び『宗門葛藤集』第一八五則「臨濟四境」にある。

僧、臨濟に問う。如何なるか是れ四種無相の境。師曰く、爾が一念心の疑、地に來たり碍えらる。爾が一念心の愛、水に來たり溺らさる。

爾が一念心の瞋、火に來たり焼かる。爾が一念心の喜、風に來たり飄えさる。若し能く是の如く弁得せば、境に転ぜられず。処々に境を用いて、東涌西没、南涌北没、中涌辺没、辺涌中没、水を履むこと地の如く、地を履むこと水の如し。何に縁ってか此の如くなる。四大の如

夢如幻なるに達するが為の故なり。

とある。



本 則

記得。定上座問臨濟。如何是佛法大意。濟下禪床、擒住与一掌便托開。定佇立。傍僧曰。定上座何不禮拜。定方禮拜忽然大悟。

謹白兩班諸菩薩子。且道定上座得臨濟力歟。將得傍僧力歟。不涉二途。爰幸左右諸子吐露一句來。

左右各々好言語。予亦別語。

二八、本 則

記得す。定上座、臨濟に問う。如何なるか是れ佛法の大意。濟禪床を下り、擒住して一掌を与えて、便ち托開す。定佇立す。傍らの僧曰く、定上座何んぞ禮拜せざる。定禮拜するに方って、忽然として大悟す。

謹んで兩班の諸菩薩に白す。且らく道え、定上座は、臨濟の力を得るか、將に傍らの僧の力を得んとすか。二途に涉らず。爰に幸いに左右の諸子、一句を吐露し來たれ。

左右各々好言語予も亦別語。

(別語省略)

①『臨濟録』の「勘弁」にある。

定上座有り、到り參じて問う。如何なるか是れ佛法の大意。師、禪床を下り、擒住して一掌を与えて、便ち托開す。定佇立す。傍らの僧曰く、定上座何んぞ禮拜せざる。定禮拜するに方って、忽然として大悟す。

とある。

本 則

記得。臨濟上堂曰。赤肉团上有一無位真人。常出入於汝等諸人面門。未証拠者看々。

謹白兩班諸大德。臨濟為人度生底端的如何弁別。請。各々道將一点語來。

左右各々玉振金声。余亦別語。

二九、本 則

記得す。臨濟、上堂して曰く、赤肉团上に一無位の真人有り。常に汝等諸人の面門従り出入す。未だ証拠せざる者は看よ看よ。

謹んで兩班の諸大德に白す。臨濟の人の為に度生する底の端的、如何が弁別せん。請う、各々一点語を道い將ち來たれ。

左右各々玉振金声。予も亦別語。

(別語省略)

①『宗門葛藤集』第一八三則「臨濟赤肉」又、『臨濟録』の「上堂」にある。

臨濟、上堂して云く、赤肉团上に一無位の真人有り。常に汝等諸人の面門より出入す。未だ証拠せざる者は看よ看よ。時に僧有り出でて問う。如何なるか是れ無位の真人。師、禪床を下って把住して云く、道え道え。其の僧擬議す。師、托開して云く、無位の真人是れ什麼の乾

屎楸ぞと。便ち方丈に帰る。  
とある。

本 則

記得。雲門示衆云。藥病相治、尽大地是藥。那箇是自己。  
謹白兩班諸禪德。雲門意旨如何會得麼。請。各々道將一轉語來。  
左右各々好言語。予亦別語。

三〇、本 則

記得す。雲門、衆に示して云く、藥病相治す。尽大地是れ藥。那箇  
か是れ自己。

謹んで兩班の諸禪德に白す。雲門の意旨、如何が會得すや。請う、  
各々一轉語を道い將ち來たれ。  
左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第八七則「雲門藥病相治」と同一。

本 則

記得。僧問雲門。不起一念、却有過亦否。門曰。須弥山。  
謹白兩班諸禪德。雲門答処如何祇對。諸各々道將一着語來。  
左右各々好言語。予亦別語。

三一、本 則

記得す。僧、雲門に問う。一念起こらず。却って過有りや亦否や。  
門曰く、須弥山。謹んで兩班の諸禪德に白す。雲門の答処、如何が  
祇對せん。諸各々一句を道い將ち來たれ。  
左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『宗門葛藤集』第四則「雲門須弥」にあり。

雲門因に僧問う。一念起こらざる時、却って過有りや無しや。門云  
く、須弥山。  
とある。

本 則

記得。雲門大師曰。乾坤之内。宇宙之間。中有一宝。秘在形山。  
謹白兩班諸位禪師。乾坤之事且置。秘在形山底。請。各々下一轉語  
來。

左右各々好言語。予亦別語。

三二、本 則

記得す。雲門大師曰く、乾坤の内、宇宙の間、中に一宝在り、形山  
に秘在す。  
謹んで兩班の諸位禪師に白す。乾坤の事は且らく置く。形山に秘在  
する底。請う、各々一轉語を下し來たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第六二則「雲門秘在形山」にある。

挙す。雲門衆に示して云く、乾坤の内、宇宙の間、中に一宝有り、形山に秘在す。灯籠を拈じて仏殿裏に向い、三門を將つて灯籠上に来たす。

とある。

本 則

記得。臨濟禪師上堂云。一人在孤峰頂上無出身之路。一人在十字街頭亦無向背。那箇在前、那箇在後。不作維摩詰、不作傳大士。珍重。

謹白兩班諸大德。如上意旨如何弁別。請各々道將一転語来。

左右各々好言語。予亦別語。

三三、本 則

記得す。臨濟禪師、上堂して云く、一人は孤峰頂上に在って、出身の路無し。一人は十字街頭に在って、亦向背無し。那箇か前に在り、那箇か後ろに在る。維摩詰と作さざれ。傳大士と作さざれ。珍重。

謹んで兩班の諸大徳に白す。如上の意旨、如何が弁別せん。請う、各々一転語を道い將ち来たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

①『臨濟録』の「上堂」及び『宗門葛藤集』第八八則「臨濟孤峰」と同

本 則

記得。保福長慶遊山次。福以手指云。只這裡便妙峯頂。謹白兩班諸大徳。保福長慶且置。即今人々遊山妙峯頂如何弁別。請。各々道將一句来。

左右各々龍吟虎嘯。予亦別語。

三四、本 則

記得す。保福、長慶遊山する次、福、手を以て指して云く、只這裏、便ち妙峯頂。

謹んで兩班の諸大徳に白す。保福、長慶は且らく置く。即今、人人遊山の妙峯頂、如何が弁別せん。請う、各々一句を道い將ち来たれ。

左右各々龍吟虎嘯。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第二三則「保福長慶遊山」にある。

挙す。保福、長慶遊山する次、福、手を以て指して云く、只這裏、便ち是れ妙峯頂。慶云く、是は則ち是なるも、可惜許。雪竇著語して云く、今日、この漢と共に遊山せば、箇の什麼をか図らん。復云く、百千年後、無しとは道わず、只是れ少なり。後に鏡清に挙似す。清云

く、若し是れ孫公にあらずんば、便ち鬪讎野に遍きを見ん。  
とある。

本 則

記得。僧問香林。如何是祖師西來意。林云。座久成勞。

謹白兩班諸大德。香林答所如何領會。請。各々道將一転語來。

左右各々好言語。予亦別語。

三五、本 則

記得す。僧、香林にに問う。如何なるか是れ祖師西來意。林云く、  
座久成勞。

謹んで兩班の諸大德に白す。香林の答所、如何が領會せん。請う、  
各々一転語を道い將ち來たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

①『碧巖録』第一七則「香林座久成勞」と同一。

本 則

記得。俱厖和尚凡有詰問唯拳一指。

謹白兩班諸大德。俱厖一指頭之意如何弁別。請。各々道將一句來。

左右各々好言語。予亦別語。

三六、本 則

記得す。俱厖和尚、凡そ詰問有らば、只一指を拳すのみ。

謹んで兩班の諸大德に白す。俱厖一指頭の意、如何が弁別せん。請  
う、各々一句を道い將ち來たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『無門関』第三則「俱厖豎指」にある。

俱厖和尚凡そ詰問有らば唯一指を拳す。後に童子有り。因に外人問  
う。和尚何の法要か説く。童子も亦指頭を豎つ。厖聞き、遂に刀を以  
て其の指を断す。童子、負痛号哭して去る。厖復之れを召す。童子、  
首を廻らす。厖却つて指を豎起す。童子忽然として領悟す。厖、將に  
順世せんとし、衆に謂つて曰く、吾、天龍一指頭の禪を得て、一生受  
用不尽と。言い訖つて滅を示す。  
とある。

本 則

記得。東山示衆曰。譬如牛過窓櫺。頭角四蹄都過了、尾巴因何不得過。

謹白兩班諸大德。東山与厖説話、有馭耕夫牛奪飢人食底之作略。華園

門下真之種草、如何著手脚。請。各々露出爪牙來。

左右各々好言語。予亦別語。

三七、本 則

記得す。東山衆に示して曰く、譬えば牛の窓櫺を過ぐるが如し。頭角四蹄都て過ぎるに、尾巴何に因つてか過ぐることを得ざる。

謹んで兩班の諸大徳に白す。東山の与麼の説話に耕夫の牛を駆り、飢人の食を奪う底の作略有り。華園の門下の眞の種草、如何が手脚を著けん。請う、各々爪牙を露出し来たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

①『無門関』第三八則「牛過窓櫺」及び『宗門葛藤集』第一六則「牛過窓櫺」にある。

五祖演禪師曰く、譬えば水枯牛の窓櫺を過ぐるが如し。頭角四蹄都て過ぎるに、甚麼に因つてか尾巴過ぐることを得ざる。とある。

本 則

記得。翠巖夏末示衆曰。一夏以来、為兄弟説話。看翠巖眉毛在麼。

謹白兩班諸大徳。翠巖眉毛説話如何弁別。請。各々道將一句来。

左右各々好言語。予亦別語。

三八、本 則

記得す。翠巖、夏末に衆に示して曰く、一夏以来、兄弟の為に説話す。看よ、翠巖の眉毛在りや。

謹んで兩班の諸大徳に白す。翠巖の眉毛の説話、如何が弁別せん。

請う、各々一句を言い將ち来たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第八則「翠巖夏末示衆」にある。

請う。翠巖、夏末に示衆して云く、一夏以来、兄弟の為に説話す。看よ、翠巖の眉毛在りや。保福云く、賊を作す人、心虚なり。長慶云く、生也。雲門云く、関。

とある。

本 則

記得。翠巖夏末示衆云。一夏以来為兄弟説話。看翠巖眉毛在麼。保福長慶底且置。雲門云。関。

謹白兩班諸大徳。上来説話如何弁別去。請。試道將一転語来。

左右各々好言語。予亦別語。

三九、本 則

記得す。翠巖、夏末に衆に示して曰く、一夏以来、兄弟の為に説話す。看よ、翠巖の眉毛在りや。保福、長慶底は且らく置く。雲門云く、関。

謹んで兩班の諸大徳に白す。上来の説話、如何が弁別し去る。請う、試みに一転語を言い將ち来たれ。

左右各々好言語。予も亦別語。

(別語省略)

①『碧巖録』第八則「翠巖夏末示衆」にある。

挙す。翠巖、夏末に示衆して云く、一夏以来、兄弟の為に説話す。看よ、翠巖の眉毛在りや。保福云く、賊を作す人、心虚なり。長慶云く、生也。雲門云く、関とある。

【答 語】

独歩晴天	晴天に独歩す。
寸釘入木	寸釘木に入る。
寸鉄在手	寸鉄手に在り。
斬釘截鉄	釘を斬り、鉄を截る。
坐見成敗	坐して成敗を見る。
頭正尾正	頭正しく尾正し。
盤裏明珠	盤裏の明珠。
出既良駒	既を出づる良駒。
物帰有主	物は有主に帰す。
超仏越祖	超仏越祖(ちようぶつおつそ)
文彩已露	文彩已に露る。
言中有響	言中に響き有り。
句裏藏鋒	句裏に鋒を藏す。
一槌両当	一槌両当(いっついりょうとう)

一見便見	一見便見(いっけんべんけん)
放一得二	一を放つて二を得たり。
二事一事	二事一事(にじいちじ)
両鏡相照	両境相照らす。
三重也有	三重も也た有り。
挙一明三	挙一明三(こいつみょうさん)
四海浪平	四海浪平らかなり。
四双八隻	四双八隻(しそうはっせき)
五逆聴雷	五逆雷を聴く。
充塞六合	六合に充塞す。
七縦八横	七縦八横(しちじゅうはちおう)
七通八達	七通八達(しつぷうはつたつ)
七擒八縦	七擒八縦(しちきんはちじゅう)
唱九作十	九を唱えて十と作す。
大似春意	大いに春意に似たり。
鴨如聞雷	鴨の雷を聞くが如し。
瓦解氷消	瓦解氷消(がかいひょうしょう)
照用斉行	照用斉しく行ず。
有擒有縦	擒有り縦有り。
驚郡動衆	郡を驚かし衆を動かす。
尽善尽美	善を尽くし美を尽くす。
同道唱和	同道唱和す。

父子唱和 父子唱和す。

唱拍相隨 唱拍相隨う。

針芥相投 針芥相投す。

函蓋相応 函蓋相応ず。

啐啄同時 啐啄同時（そつたくどうじ）

天晴日頭出 天晴れて日頭出づ。

父子相投和 父子相投和す。

一歳有一春 一歳に一春有り。

和氣兆豊年 和氣、豊年に兆す。

吹面受和風 面に吹く和風を受く。

言鋒冷似氷 言鋒、氷似も冷ややかなり。

別是一家風 別に是れ一家風。

溪梅一朶香 溪梅一朶香ばし。

梨花一枝春 梨花一枝の春。

有麝自然香 麝有れば自然に香し。

利劍不如錐 利劍も錐に如かず。

一箭中紅心 一箭紅心に中る。

一句定綱宗 一句綱宗を定む。

二尊不並化 二尊化を並べず。

一鏃破三関 一鏃三関を破す。

三山鎖夜光 三山夜光を鎖す。

春無三日晴 春に三日の晴れ無し。

四海同一家 四海同一の家。

五更一盃粥 五更一盃の粥。

六耳不同謀 六耳謀を同じゅうせず。

七星光燦爛 七星光燦爛（しちせいひかりさんらん）

八風吹不動 八風吹けども動ぜず。

九日是重陽 九日は重陽。

虎嘯五更前 虎は嘯く五更の前。

荊絲林中一条路 荊絲林中一条の路。

婆竭出海竜宮震 婆竭、海を出でて竜宮震う。

金翅鳥王当宇宙 金翅鳥王宇宙に当たる。

十分春色満人間 十分の春色、人間に満つ。

一枝梅花和雪香 一枝の梅花、雪に和して香ばし。

象角雖多一麟足 象角多しと雖も一麟足れり。

太平一曲大家知 太平の一曲大家知る。

為君幾下蒼龍窟 君が為幾たびか蒼龍窟に下る。

入火真金色転鮮 火に入って真金転た鮮やかなり。

剗人削成棟梁材 剗人削り成す棟梁の材。

丈夫意氣自衝天 丈夫の意氣、自ら天を衝く。

錦上添花別是春 錦上に花を添う、別にはれ春。

三千里外有知音 三千里外に知音有り。

龍蛇陳上看謀略

龍蛇陳上に謀略を見る。

咬人獅子爪牙張

人を咬む獅子爪牙張る。

四海香風從此起

四海の香風此從り起こる。

龍在潛淵鶴有巢

龍は潛淵に在り、鶴は巢に有り。

金鷄報曉五更前

金鷄は曉を報ず五更の前。

焦尾大蟲元是虎

焦尾の大蟲、元是れ虎。

良馬何曾勞鞭影

良馬何んぞ曾て鞭影を勞せん。

孫輪独照江山靜

孫輪独り照らして江山靜なり。

玲瓏八面起清風

玲瓏八面清風起こす。

白雲片々嶺上飛

白雲片々嶺上に飛ぶ。

知音自有松風和

知音自ら松風の和する有り。

話尽山雲海月情

語り尽くす山雲海月の情。

【別語】

松樹千年翠

江月照 松風吹

暮春者春服既成

有女同車 顏如舜華

玉將火試 金將石試

雲收万岳 月上中峰

劍刀上事 火事火事

冠者五六人 童子六七人

苦瓠連根苦 甜瓜徹蒂甜

古今無二路 達者共同途

拳頭殘照在 元是住居西

山花開似錦 澗水湛如藍

只許老胡知 不許老胡會

手把白玉鞭 驪珠尺擊碎

宿宿已三宿 未出芙蓉元

長安一片月 万戶擣衣声

朝見雲片片 暮聽水潺潺

到江吳地尽 隔岸越山多

人自橋上過 橋流水不流

不知何処寺 風送鐘声来

法々本来法 心々無別心

一口吸尽西江水 洛陽牡丹新吐藥

有意氣時添意氣 不風流処也風流

雨洒淡紅梅藥嫩 風搖淺碧柳条新

金針曾不露鋒鋷 惹得無絲玉線長

溪声便是長広舌 山色豈非清淨身

月沈野水光明蔵 蘭吐春山古仏心

吾奴不識錦囊重 裏得青山暮色帰

四海浪平龍睡穩 九天雲静鶴飛高

徐行踏断流水声 縦看写出飛禽跡

秋天曠野行人絶 馬首東来知是誰

十洲春尽花凋残 珊瑚樹林日杲杲

深々海底猶嫌淺 直向金剛水際行

青山緑水元依旧 明月清風共一家

千溪万壑帰滄海 四海八蛮朝帝都

千江有水千江月 万里無雲万里天

白雲鎖断岩前石 掛角羚羊不見蹤

八八元来六十四 九九即是八十一

不依風動庭前樹 争得桂花撲鼻香

要求則背不求違 陰森夏木杜鵑鳴

流水自帰滄海去 白雲依旧宿蘆花

堯風蕩蕩野老謳歌

舜日熙熙漁人鼓棹

堯風蕩蕩野老謳歌

舜日熙熙社稷安寧



## 前堂垂示沿革考

——跋文に代えて——

前堂転位に当り、垂示を履行すべきことを規定した妙心寺壁書は次の通りである。

一、転位之人有<sub>レ</sub>之時、就<sub>ニ</sub>于其派之本庵、百日在寺之内、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>相<sub>ニ</sub>動垂<sub>ニ</sub>示<sub>ニ</sub>寺役等。但傑出之人者非<sub>ニ</sub>制限<sub>ニ</sub>云々（寛永十四仲冬十八日）

一、向後転位之仁、不<sub>レ</sub>限<sub>ニ</sub>在寺田舎、一等<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>執<sub>ニ</sub>行垂<sub>ニ</sub>示<sub>ニ</sub>事云々（貞享元年子歳十月 日）

抑々前堂職は妙心寺に於いては特に重んぜられ、後堂（後板寮）の首座から前堂（前板寮）の首座に転位（転板）する為には大法相続をその資格とし、壁書では屢々その事を強調して、「印証明白」（慶安二年）「二十年可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遂<sub>ニ</sub>宗門之遍歴<sub>ニ</sub>」（明暦二年）と言つてゐる。又、前版請状の書式に

效奉<sub>ニ</sub>

堂頭和尚尊命、請某譯後版、転<sub>ニ</sub>当山前版第一座。寔叢林典型・人天

眼目、分座説法、開鑿后昆、維<sub>ニ</sub>其職<sub>ニ</sub>也云々

と謳はれてゐるのは、勅修百丈清規に「前堂首座、表率叢林、人天眼目、分座説法開鑿後昆」（西序章第八）とあるに拠るものであるが、更に之を詳述した「正法山出世位階等法式略記」（松濤書庫蔵）の記事を左に挙げて解説に代えよう。

一、前堂転位は、二十年遂<sub>ニ</sub>宗門之遍歴<sub>ニ</sub>、修行純熟、其師之印証明白<sub>ニ</sub>

而僧臘恰好之節、其国諸知識吹嘘之連署を宿坊江持参仕、猶又於<sub>ニ</sub>本山<sub>ニ</sub>其法類遂<sub>ニ</sub>吟味<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>開山塔前<sub>ニ</sub>垂<sub>ニ</sub>示<sub>ニ</sub>為<sub>ニ</sub>相<sub>ニ</sub>勤<sub>ニ</sub>、其人を致<sub>ニ</sub>勸<sub>ニ</sub>驗<sub>ニ</sub>の上、法類之内、吹嘘状相認、其派本庵江差出候得ば、其本庵之塔主、右吹嘘状致<sub>ニ</sub>持<sub>ニ</sub>参<sub>ニ</sub>、一山巡覽、別条無之時は、前堂職状降与仕り、師家分上<sub>ニ</sub>罷成申候、惣而於<sub>ニ</sub>妙心寺派<sub>ニ</sub>任<sub>ニ</sub>前堂職<sub>ニ</sub>候人者、伝法相続仕候、座牌を称<sub>ニ</sub>某座元<sub>ニ</sub>候、其年臘致<sub>ニ</sub>到来<sub>ニ</sub>候得ば、大徳寺妙心寺<sub>ニ</sub>相限り、不<sub>レ</sub>歴<sub>ニ</sub>西堂黄衣之階級<sub>ニ</sub>、黒衣之前堂一級与<sub>ニ</sub>妙心寺住持職<sub>ニ</sub>罷成、綸旨申降、紫衣着用仕候、五山杯之前堂とは訣違申候。且又、妙心寺派前堂は滅後諡禪師号奏請仕候。其勅書之内、某和尚と被成下候先格も御座候。（延享三年四月廿六日江府三箇寺に建せる文）

以上で明かなように、前堂は黒衣でありながら師家分子であり、嫡々相承の印証明白なる人であるから、従つてその「垂示」は、単に義務であるばかりでなく、請ぜられて分座説法を行う法筵でもある。

現今の宗制に於いて、住職資格として前堂職を稟承し、法系と道号を明かにし、開山塔前に法脈相承公式を履行すべき旨を規定してゐるのは「伽藍法」の立場に立つて、法系相承を認めんとするものに他ならぬ。従つて今日の前堂垂示の多くはその實質に大なる変化を認めなければならぬが、然かもその本来の意義を認識し、法の尊嚴を自覚することは法脈相承公式の眼目でなければならぬ。即ち、禪堂に於いて実地参得せる一則の古則を挙揚し、両班の禪客の着語を諦聴し了つて後、自己拈得底の別語を唱え、之を以つて法脈相承の力量を公認される事となるのである。

この本写本は、福寿院謙応和尚の三回忌記念として、和尚所蔵の写本を複写したものである。願はくは塔頭宿院の恵存を得て、垂示指導の一資料ともならば法幸である。

き御教示されたことを付し感謝申し上げる次第である。

昭和廿九年二月十七日

福寿院代務者 黙 宗 識

最後に本書を著わした「福寿院代務者 黙宗」について述べることにする。

福寿院は、妙心寺塔頭で、現在も住職は無く、兼務されている。

黙宗師は、本名を木村静雄といわれ、元花園大学教授であった方である。その略歴は、明治四年七月生まれ、大正十四年名古屋愛知中学より花園中学へ転校、昭和二年花園中学を卒業し臨済宗大学へ入学、昭和七年卒業。同時に円福寺僧堂へ掛塔、十一年三月まで在錫、後に養徳院住職となる。同年四月、臨済学院専門学校の図書館司書として、就職、十八年戦争に出征する。終戦後、図書館を退職し、二十四年に花園大学の講師となる。二十八年助教、三十五年教授となる。三十九年花園大学を退職され、同年四月より禅文化研究所理事、事務局長となつて五十四年まで事務局長に在職していた。昭和六十二年遷化された。

黙宗師の略歴については、花園大学助教の中尾良信先生にお調べ頂